

## 1 自己評価

- I 評価結果（別紙参照）
- II 分析・改善方策（別紙参照）

## 2 学校関係者評価委員名

岡崎 正和（学校評議員）	森藤 博子（学校評議員・P T A役員）
金田ゆかり（学校評議員）	三好 ゆみ（P T A役員）
畦 浩二（学校評議員）	高村さな恵（P T A役員）
大澤 和弘（学校評議員）	景山 由美（P T A役員）

## 3 学校関係者評価

昨年度まではコロナ禍で学校行事の中止が続いていたが、今年度は、I C Tの活用を含めた実施形態の変更など、コロナ禍でも実施できる行事の在り方を研究し、生徒の主体的な活動を行ったところが評価できる。特に、学校祭である「蒼碑祭」では、コロナに係る制限下で、生徒及び教員がいかによりよいものを作り上げるかを考えて行動できており、学校行事を通して生徒の資質・能力を高めている。今後は、発表会やボランティア活動など、校外で実施される行事等に積極的に生徒を参加させることで、人々と関わり、主体性や協調性などを育ててほしい。

また、今年度1年次から導入している一人一台端末について、教員が積極的に端末を活用させるような授業展開を研究し実施していた。日々の授業に当たり前のように端末を活用している授業も多く、組織的に行われている。今後は、生徒の活用に加え、電子媒体と紙媒体の在り方を研究し、教職員における業務の効率化を目指してほしい。

全体的に、コロナ対応をしながらも工夫して教育活動を続けた1年間であり、教職員の業務負担が大きかったことが学校評価アンケートからも見て取れる。業務の効率化を進めるとともに、物事を成功させるための方法を教員間で共有し、実施した内容が成果に現れていることを自己評価する機会を増やしてほしい。

## 4 来年度の重点取組

I C T活用やアクティブ・ラーニングによる授業改善を行うとともに、指導と評価の一体化による評価の研究を進めていく。また、総合的な探究の時間のカリキュラムを検証・改善し、生徒の探究活動を推進するとともに、学校外の活動を含めた学習機会と場の研究を行う。アフターコロナを見据え、コロナ禍で得た知恵や工夫を取り入れながら、生徒が集団の中で主体的・協働的に活動できる取組を検討し実施していく。I C T学習環境の整備を進めながら、業務の効率化と持続可能な組織編成を研究する。